



Title	動詞の内部構造と付接辞嵌入について
Author(s)	出口, 厚実
Citation	Estudios Hispánicos. 1980, 6, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/93587">https://hdl.handle.net/11094/93587</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 動詞の内部構造と付接辞嵌入について

出口厚実

0. スペイン語の付接辞 (Clitic) が肯定命令形や不定形動詞に後置され、動詞の定形・否定命令形に先行するのは何故だろうか<sup>(1)</sup> また、従属動詞の目的語である付接辞がある種の主動詞に付接し得るのはどうしてであろうか。小論の目的はこの付接辞位置の非固定性に対する一つの説明を試み、位置決定のメカニズムを探ることである。

## 1. 付接辞と動詞

多くの議論で、とりわけ付接辞という範疇を用いない文法記述で、“「(弱形) 代名詞」は定動詞に前置される”とか“不定形に後続する”などと述べられ、代名詞と動詞との統語・形態論的結合関係を曖昧にしたまま、ただ“前に来るか、後に来るか、何番目に来るか<sup>(2)</sup>”の前後順序として誤って捉えられている。

付接辞が動詞に先(後)行するというだけでは不正確で(1)a, b, c, のどのケースを指すか不明である。どの文成分に付接するかがまず問題で、

(1)	a.	b.	c.
	X-Cl V Y	X Cl-V Y	X-Cl-V Y
	X V-Cl Y	X VCl-Y	X V-Cl-Y

左接するか、右接するか、両接するかで以て更に区別されなければならない。

自らは弱勢で動詞と共に音韻的一語を構成するスペイン語 clitic は独立形NPと著しく異なる統語的behaviorを示し<sup>(3)</sup> その地位はむしろsuffixと同等と言っても良い位である。

即ち、形態音韻上の境界明瞭性(単位の抽出が容易であること)とわずかな可動性(移動規則としてしばしば取り上げられる付接位置の非固定性)を別にすれば、主格NPの人称・数をマークする接尾辞が課せられている拘束性をほぼ備えている<sup>(4)</sup>。

本稿は clitic を、動詞の左端又は右端に付着する小辞というよりはむしろ、多少の独立性を持つものの實際上動詞自体の内部に嵌入（編入）されている affix であるとみなす。この立場は、付接辞を一般名詞句よりも弱体な単位であることを認めつつも、独立した代名詞としての自律性を否定しない従来の分析から更に進んで、clitic と suffix の近似性を強調し、両者が同じ範疇の成員として協調あるいは相剋する可能性を主張する。付接辞が動詞の外側から動詞に連結しているという見解と、内部に嵌入されていて動詞+付接辞も又全体として動詞であるという分析法の違いは、clitic の出現位置をどのように説明するかに関して悔れない意義をもつ。

## 2. 動詞の内的構造

統語論的観点から見た動詞の構造と形態論上の動詞組成 (cf. 出口1971) が同一である、あるいは一対一対応の関係にあるという証拠はない。動詞がどのような形態論の単位に分析されるか、又その生成の機構についてはかなりの考究がなされている。しかしそこで対象となる動詞は、伝統的な定動詞・不定形動詞の範囲内であって、clitic と動詞の構成要素を関連づける試みは殆ど皆無であった<sup>5)</sup>

付接辞の位置を考察する上で、拙稿はスペイン語の動詞は統語的に(2)のような内部構成を示すものと仮定する。Vroot は動詞語彙項目を音形的に

$$(2) \quad \left[ \underline{\quad A \quad} \quad \text{Vroot} \quad \underline{\quad B \quad} \quad \underline{\quad C \quad} \right] \text{V}$$

弁別する部分(いわゆる語根)で、前後に位置する3ヶの空所と共に動詞語形を形成する。A及びCslotは空でもよいが、適格な動詞形が生まれるためにはBslotは、non-nullでなければならない。

最後位のCslotは呼応規則によって主格NPのマーク(SM)を受け入れる容器として必要である。主語呼応形態素をもつ動詞は原則として時制構成素(Tns)をも含むので、もう一つの空所B slotが必要となる。時制はより深い統語構造で、相・時制を表現する述語としての動詞又は動詞群であったと考えられる。時制の意味と形態表示の連関については拙稿(1977)でその概要を検討したが、tense verbは直接、接辞として動詞内に導入されるのではなく、浅層レベルで(2)のような動詞枠の内部でほぼ表層形態カテゴリーの類別に等しい「現在、完結相過去、未来…」等の範疇で特徴づ

けられる時制構成素に統合されるものと仮定する<sup>(6)</sup> さて、不定詞-r・現在分詞-ndo形は無時制の補文を標識化しているから、そのための新たな slot は要らず、B slot に出現できる。不定形には稀に主語が削除されず表層まで顕在することがあるが、無時制文に主格呼応は作動せず、C slot は空のままである。過去分詞-do形はいわゆる複合時制の一部を形成する場合と、伝統的に分詞構文と呼ばれる構造や連体修飾的に使用される場合とに2分される。前者で-d-は基底時制動詞Past<sup>(7)</sup>の実現の一部としてB slot を占め、-o語尾は、“相手なき呼応”無呼詞中格呼応<sup>(8)</sup>の常として、最も無標な性数形態素つまりmas. sg. をC slot に得たものである。

他の種類の過去分詞i. e. 能格体系の切換えを司令する従属節導入標識-d-も又B slot に嵌入し、出口(1979b)で示したようなAbsolutive NPとの呼応が行なわれ、その呼応形態素-o, -a, -os, -asのいずれかがCに出現する。

次に、命令動詞を含む(3)の各文は統語単位としての「時制」を欠くので

- (3)a. Ven mañana.
- b. No vengas mañana.
- c. Cierre usted las ventanas.
- d. ¡Vamos!

はないかと考えられる。命令文は過去時制文や完了時制文へ転換することができない。“命令行為”そのものにpragmaticな時間が内包されているためである。例えば(4a, b)が聞き手に対して、ある種の行為の要請として発話された場合、これらは「時制」に関して(3a, b)と対立しない。即

- (4)a. Vendrás mañana.
- b. No vendrás mañana.

ち(3)文が現在の命令であり、(4)が未来命令であるというようなことはなく、Tnsはirrelevantである。両者の相違は(3)が統語形式と意図される発語内行為が一義的に対応する「直接発話行為文」であるのに対し、未来形動詞を含んだ(4)は、通常、主張的断定文であるが、会話の諸条件が整えば話者はそれにより要請・命令の「間接発話行為」を行なうという発語内力の差(illocutionary force)である。(3b, c)で動詞は接続法現在に屈折していて、(3d)のvamosは直説法現在形であるが、これら時制形の“現在”

は命令文に存在する tense によって選ばれたのではなく、一種の suppletion によるものと思われる。従って、(3b) の vengas は接続法現在幹、venga- と SM を補充法的に命令文に借用したものであるが、その本来の時制表示機能は溶解している。

以上を要約すると、付接辞を除く動詞構成部分は次のような統語的枠の中に生起する。<sup>(9)</sup>

(5) i) 定動詞 (        Vroot        Tns        SM )<sub>v</sub>

ii) a. 不定詞 (        Vroot        -r )<sub>v</sub>

b. 現在分詞 (        Vroot        -ndo )<sub>v</sub>

iii) 過去分詞 (        Vroot        -d-        AM )<sub>v</sub>

N. B. AM: 絶対格の性・数

iv) 命令動詞 (        Vroot        SM )<sub>v</sub>

上の図で動詞内に空欄として残されている A slot 及び C slot の一部に問題の目的語 marker (OM) が現われる。この付接辞は目的語呼応規則によって導入される素性複合 (agreement morpheme) そのもとの思われるが、<sup>(10)</sup>以下の議論はこのことと無関係に、付接辞を承前代名詞と見る従来 of 通説に対しても同等に有効である。

### 3. 先取権の階層

動詞内の空所(2)は無秩序に適当な marker により埋められるのでもなく、又各 slot に厳密に指定された形態素が割当てられているのでもない。A B C の各 slot は付接辞・接辞にとって同じような魅力をもつのではなく、B が最も好まれ、次に A, C の順で所望されると考える。(6)の序列は動詞根の直右の位置が接辞類に一番求められている position であり、もし空所を

(6) B > A > C

埋める候補者が 1 要素しかない場合、当然この B slot に立つことを意味する。2 種の、marker が動詞内に入ろうとすると、B, A 両 slot を占めるのが順当である。

充填要素の選択権は対等でなく、有利な位置を確保するための先取権のハイアラキーがあり(7)の順序を仮定する。時制つき動詞では Tns はまっ先

(7) Tns > SM > OM  
(comp)

にB slot を占める。主語の人称・数markerは(6)によればA位置に来るはずだが、Tns-SMは形態論的融合が起り得るため、「時制が存在する時はその右にしか立てない」という制約を負い、結局Cをとる。

—r, —ndo, —d—の補文標識は一種の無(標)時制のmarkerであり、且つTnsと相補分布をなすので、先取権に関してTnsと同じランクであると考えられ、(5 ii, iii)のようにB slotに収まる。又Tnsが欠如する命令動詞に対してなSMが最恵slot Bを取る。先取権で最低rankの目的語標識、(=clitic)はTns, comp; SMが既に位置を確保した後の(8)の残余空所

- (8) a. ( \_\_\_\_\_ Vr—Tns—SM ) v      定動詞  
 b. ( \_\_\_\_\_ Vr—SM \_\_\_\_\_ ) v      命令動詞  
 c. ( \_\_\_\_\_ Vr—r \_\_\_\_\_ ) v      不定詞  
 d. ( \_\_\_\_\_ Vr—ndo \_\_\_\_\_ ) v      現在分詞

slotの中から(6)の基準にそって自らの落ち着く先を見い出そうとする。

#### 4. 付接辞の位置

§ 2に示した動詞の基本的枠組みと、前節の2つの序列によって次例文(9 a, b, c)(11 c)における付接辞の位置は自動的に説明される。

- (9) a. Lo digo.  
 b. Lo dije.  
 c. Lo diré.  
 (10) a. Diciéndolo, temblaba mucho.  
 b. Al decirlo, temblaba mucho.  
 (11) a. Dilo.  
 b. Dígallo usted.  
 c. No lo digas.

まず、(9)のような時制付動詞では主格・動詞呼応後、B, Cslot共に塞がれているため (cf. (8a)), cliticは選択の余地なくA slotの動詞左位を占める。命令動詞はSMがその位置を取った後、(12)を示し、A, Cのいずれ

- (12) [no] ( \_\_\_\_\_ Vr—SM \_\_\_\_\_ ) v

にも付接辞が嵌入し得る。(6)の原則によればcliticな(11 a, b, c)で共にA slotを埋めなければならない。しかし肯定命令文(11 a, b)でOMはC slotに入っている。この理由はスペイン語の文法が次の規制を持っているからであろうと想定できる<sup>(11)</sup>

(13)命令文で動詞が文頭に立つとき、動詞根を文頭に露出しなければならない。

肯定命令文で(13)と(6)は矛盾するが、前者が後者をoverruleして、(14 a)の左方空欄は破壊される結果、(b)と変わらない姿となる。

- (14) a. [( \_\_\_\_\_ Vr-SM \_\_\_\_\_ )v.....]s  
 b. [( Vr-SM \_\_\_\_\_ )v.....]s

そこで付接辞の入る余地はSMの右しか無く、(6)の所望順列にも拘らず、OMのloは語根よりも右方のC slotに編入される。一方、否定命令文は(13)に該当しないから、(6)の適用でcliticは前入される。

- (15) [no ( OM Vr-SM \_\_\_\_\_ )v.....]s

序列(6)の原理は単純で、右側が左側より好ましく且つ語根に近い程望ましい位置であることを示している。また(6)のハイアラキーでslotは動詞根の右、左という順で選ばれることにより、先取序列で順位を接するSMとOMが反対のsideに出現することを間接的に保証し、異格をマークする形態素を引き離して認知力の低下を防ぐ効果をもつ。

(13)はclitic のためにのみ仮定されるのではなく、命令文の主語名詞句が文頭を排除される後置現象を含めた、更に一般的な事実の一部である。

ところで、不定詞・現在分詞を含む(10 a, b)ではOMがSMの右ではなくVrの左位を奪取しないのは何故だろうか。それは(16)の制約で妨害されるとみなされる。

- (16) 同一節内で名詞句(標識)はcompに先行できない。

(16)は(6)を超規して不定形動詞の根前空所を閉鎖させる機能をもつことと同一視できる。<sup>(12)</sup>

- (17) ( ~~\_\_\_\_\_~~ Vr-comp OM )v

それ故、(17)でcliticの入り得る位置はC slotしかない。尚、compとOMの先後関係は語順タイプの推移的变化と関係があり、OV型にふさわしい文末compを、全体的VO系への移行に伴い、なるべく節頭に先出させ、語形態上を止むを得ぬ動詞根以外の要素を排除せんとする傾向で説明がつくのではないかと考えられる。またcompを含む従属文と命令文はtenselessであるという共通項をもつので、<sup>(13)</sup>(13)は一般的な次のような制約に書き直すことができる。

(18) Tnsのない文頭動詞は語根を文頭に露出しなければならない。  
 これまでに述べた序列と制約を整理すると(19)で表わされる。

(19) A. 序列

- i) 優先位置順位：B > A > C
- ii) 先取権順位：Tns > SM > OM

B. 制約

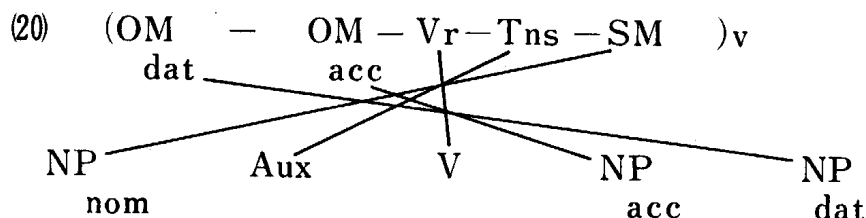
- i) 先行制限：
  - a. 同一節内で ~comp-NP(marker)~
  - b. 同一動詞内で~Tns-SM~
- ii) Tnsのない文頭動詞は語根を文頭に露出しなければならない。

C. 規約

制約は序列を超規する。

5. 束縛辞と自由語

目的語標識が嵌入されるslot内におけるse・与格・対格付接辞の内部順序についてはここで論ずる余裕がないが、一般に与格~対格の順位が成立する。動詞内部の各markerの機能と各々の対応自由構成素の無標語順は興味深い対称を示す。Auxをpoder, empezar(a), haber, acabar(de), ir(a)...等のmodalや時制代用表現とするとこれは, aspect, mood, tenseの



cover termであるTnsの独立形における対応物と考えられるので、OM, SMを合せて拘束markerは自由構成素の鏡映順序になっていることに気づく。このような線形順序の対応は偶然の所産なのか、あるいは少なくとも一部は、拘束標識により古いOV型の求心的語順が化石化して残った史的变化の残滓なのか(Givón1971: 396-7) 不明であるが、OMが定動詞に対して原則的にprocliticizeされると分析すれば、反転関係は完全であることが(20)で示される。動詞を軸とした鏡像が崩れるのは(19B)の制約のためであるが、この制約は動詞根の前に文法項を排除する一般的な条件の一部に含まれるもので、命令文において呼格的な主語が、又不定詞・現在分詞

節の明示主語が後置を受けるのと軌を同じくして連動している。<sup>(14)</sup>

## 6. 付接辞移入

付接辞は本来それが文法関係を結んでいる動詞（以下で原動詞）の内部に編入されず，その動詞を統語的に支配している上位動詞内に嵌入される

(21) a. Empezó a leerlo.

b. Lo empezó a leer.

(22) a. Continúa practicándolo.

b. Lo continúa practicando.

ことがある。(21)(22)における a, b 両文の関係は，a 文の位置から b 文の主動詞前位へ clitic を移動させるルール，i. e. 付接辞登攀 (Clitic Climbing) v. gr. Roldán (1974:131) として捉えられるべきか，あるいは原動詞と上位動詞文の構造削減 (Clause Reduction, Verb Adjunction; cf. Aissen & Perlmutter 1976, Aissen 1977, Rivas 1977, Contreras 1979) により生じる自動的昇格 (Promotion) なのかは，なおオープンな問題である。また登攀説にしても構造保持規則として空の代名詞節点が上位転入動詞句に存在すると仮定する (Strozer 1976:339) か否か，又 Kayne (1975:76) Quicoli (1976:200) の規則のように付接辞移動の道筋に変項が含まれるべきか，否か (Bordelois 1978:31-2, Luján 1979:47-50) の議論がある。さらに文法規則に対する一般的条件で規制され得る clitic の転出と，付接辞に特有な局部的制限との分類，また上位動詞の意味クラスによる制御 (government) の程度 etc. の詳部は今後の究明に待たなければならないだろう。

しかし，どの分析において殆ど触れられていない重要な一面がある。それは一体なぜ付接辞が任意的にせよ原動詞を離脱して意味関係の薄い異動詞の領内に侵入するかという点である。登攀を妨げる諸条件を発見することと clitic 離脱の説明とは別の問題であって，前者のみでは後者を証明することはできない。即ち，障害がなくとも付接辞は原動詞内に止まり得るし，離脱しなければならない理由はないからである。

付接辞移入の第 1 の前提は支配動詞と原動詞間の結合度の高さであり，前者の意味機能が非語彙的になればなる程，両者の融合は密になり易い。

例えば(21)(22)に見られる aspectual verb では従属動詞の意味核に対して，

empezar, continuarは独立性を失う傾向を内在する。例文(21)においてempezar a leerが一つの複合動詞に縮約されると仮定した場合でも、loは依然としてleerの直接目的語としての関係を維持する。にも拘わらずこれがempezarに前接され得るのは何故であろうか。§4の枠組みに従えば文(21)のOMはTns・SMの位置が確定した後の状態(23)の動詞slotの空きへ編入

(23) ( \_\_\_\_\_ empez-Tns-SM) V<sub>2</sub> a (le-r \_\_\_\_\_) V<sub>1</sub>

することができる。目的語loはleerの意味辞項であるからV<sub>1</sub>の空slot Cに入るのが自然の成り行きで、実際、(21a)が成立する。しかし一方でB>A>Cの順で各slotはより嵌入目標により易いので、もしV<sub>1</sub> V<sub>2</sub>が一体化した一動詞であるならば、loはA slot, i. e. empezarの左位をねらい、その結果(21b)の語順を持つ文が出来る。

特定の表層文で動詞連結が起きたか否かの外的証拠はclitic位置以外に存在しないようなので、付接辞が任意的に2つ以上の位置に現われる事実をClause Reductionの任意性で説明するのは循環論法になりかねず説得力は弱い。小論で提案しているような動詞の枠構造を仮定すれば、付接辞が初期文法関係を結んでいる本拠地の動詞に落ち着こうとする自然な傾向と異動詞圏のA slotの牽引力のバランスがOMの可動性をもたらすと解釈でき、上の欠陥を補強することができる。

以上の考察から、(21)(22)のa, b文対立は任意的規定(24)の発動によるものとみなせる。

(24) 原動詞のslotは連結異動詞のどのslotよりも充填目標になり易い。節削減を惹起する上位動詞であっても、そのA, B slotが既に他の要素で占められているか、又は禁制により入り込めない時、原動詞が付接辞を解

(25) a. ¡ Empieza a leerlo!

b. ¡ Empiézalo a leer!

(26) a. ¡ Continúa practicándolo!

b. ¡ Continúalo practicando!

(27) a. Manuel insistió en ir a verla.

b. ? Manuel insistió en ir a verla a ver.

放するのはやや異例であり、次のような傾向が認められる。今(25)のloが嵌

(28) 優先位置のランキングに関して、原動詞のslotは異動詞の同種slotよりも優位に立つ。

(29) (empez—SM \_\_\_\_\_) V<sub>2</sub> a (le—r \_\_\_\_\_) V<sub>1</sub>

入される過程を見るならば、(29)の段階で原動詞も移入候補動詞も A slot は塞がっているが、(24)の規定により OM は V<sub>1</sub> leer 内に付接化され得る。しかし(24)が援用されなければ、lo が V<sub>1</sub> V<sub>2</sub> のどちらの C slot を占めるかは全く自由変異を示すのではなく、(28)の傾向によって(25) a 文の方がより一般的である。(26)の両文も同様に説明されるだろう。(27)における insistir en は節削減を trigger しないものの、ir a とその不定詞補文は結合する。ところが (b) の受容性がやや低いのは ir a の A slot が利用不能な“閉ざされた”空所で、原動詞に属する la を牽引するのは C slot であり、その力は微弱であることに起因するのである。

### 7. 従来の記述との比較

有吉 (1977: 37-8) は(30)~(32)の3規則で以て(9)~(11), (21)(22)に類する文の付接辞分布が説明されると主張している。<sup>15)</sup> 例えば(9)(11 c) (21 b) (22 b) の各文のように定形動詞に前置される“弱形代名詞”の位置は(30)の Proclitization により、又 (21 a) (22 a) は(31)の尾接規則 I で、そして肯定命令文 (11 a, b) は Enclitization rule II でそれぞれ説明されると述べている。

#### (30) Proclitization rule

$$X - Vf - \left( \left\{ \begin{array}{l} (\text{pre}) + V_{\text{inf}} \\ V \sim \text{ndo} \end{array} \right\} \right) - Y - \left[ \begin{array}{l} +\text{Pro} \\ -\text{Emph} \end{array} \right] - Z$$

1	2	3	4	5	6
→ 1	5 # 2	3	4	φ	6

条件 1. 2 3 4 5 は唯一共通の S に支配される

2. 3 = φ の時, obligatory

3. 3 ≠ φ の時, optional

#### (31) Enclitization rule I (obligatory)

$$X - Vf - \left\{ \begin{array}{l} (\text{pre}) + V_{\text{inf}} \\ V \sim \text{ndo} \end{array} \right\} - Y - \left[ \begin{array}{l} +\text{Pro} \\ -\text{Emph} \end{array} \right] - Z$$

1	2	3	4	5	6
→ 1	2	3 # 5	4	φ	6

(32) Encliticization rule II

$$\begin{array}{cccc}
 X - \left[ \begin{array}{c} +\text{Pro} \\ -\text{Emph} \end{array} \right] & Vf & - & Y \\
 1 & 2 & 3 & 4 \\
 \rightarrow 1 & \phi & 3 \# 2 & 4
 \end{array}$$

条件：X =  $\phi$  かつ Vf = Vimp の時，obligatory

一般に，ある言語事実 f の文法的説明とは，単に f の出現条件を一定の所与条件から予測する定式ではなく，f が f を含むより大きな言語事実に対する，虚偽であると確証されていない法則性 L に従っていることを示すことである。説明  $\epsilon$  は f と L の包含関係を否定することによって，あるいは一般法則 L の非存在の指摘によって反証され得るし又，より高次の法則 L' の発見によっても起克される。

このような見方に立てば，有吉 (1977) の諸規則はスペイン語付接辞の位置を殆ど何も説明していないし，従ってその説明の適否を云々する筋合いのものではない。(30)(31)の接辞化ルールは隣接して順序づけられているにも拘らず同一の構造記述をもち優雅さに欠けるのであるが，それは措くとして，これらが表現している内容は「「代名詞」は定形動詞の前に置かれ，不定詞・現在分詞の後に付く」という伝統文法の規定と異なる点がない。もし違いがあるとすれば，それは，記号・略号を駆使した(30)~(32)が巧緻に組み立てられた高級な理論に基いているらしいと想像する，変形文法 [のある version] に通曉しない (したくない・することを諦めた) 人々の誤解か錯覚であろう。

規則(30)~(32)が付接辞配置を正確に予知するか否かを一々ここで検証する余裕はないし，又それは本稿の目的でもないが，一見してわかる通り，有吉のこの方式では(10)(27b)の各文が生成できない。更に(30)Proclitizationにより非文(33a)が生まれる反面，文法的な(b)(d)文は，仮に(30)に対する例外として指定されても，付接辞が“宙に漂う”ことになり，

- (33) a. \*Juan la desea mucho ver.
- b. Juan desea mucho verla.
- c. Debe querer hacerlo.
- d. Tengo que hacerlo ahora mismo.

いずれにせよ導出されない。また規則(30)は任意無差別に次文に類する多数の文を適格文として過剰生成してしまう。(30)の構造記述に見られる連鎖，

- (34) a. \*Lo insiste en hacer.  
 b. \*Lo parece esperar.  
 c. \*Lo lamenta haber dicho.
- (35) a. \*La quiere ir a la estación a ver.  
 b. \*Lo debe desear mucho ver.

Vf-(pre)-Vinf は必要条件ではあるが十分条件ではないからである。それ故、有吉 (1977) のclitic配置規則は観察的妥当性(Observational adequacy)においても不適切である。

そこで提案されているルールは、形態論のカテゴリーである定形、不定詞、現在分詞などを統語的に分析することなしに、cliticの位置を統語的に決定する条件として利用する伝統的な立場が貫かれている。

小論においては、動詞が個有に持つslotの数とそのランキングを指定し、Tns~SM~OMの間の承接順序の一部としてcliticの嵌入場所が規定されるのを見た。即ち、付接辞の位置が付接辞や他の文法要素を包括する高次の規則性で、又他の統語的単位のもつ規則性によって説明され得ることを示した点で、従来のアプローチと異っている。

序でながら、(36 a, b)文が拙稿(1975)では説明不可能だという有吉の批判(1977:39, 44)は理解し難い。独立主文、従属節の主語NPの

- (36) a. La vio Carlos.  
 b. Dijo que me lo daría María.

後置は付接辞の有無と無関係である故、前稿で取り上げなかったが、Clitic配置の後に談話構造上の情報価値の新・旧やpragmaticな重要度に感応する線状化規則でしかるべき配置(又は削除)が行なわれれば、(36)両文は出口(1972, 75)の枠組みで難無く導き出せる。一口に語順と言われるもののうち、OMの付接場所、命令主語の後置のごとき統語上の形式的規制と、前述のような情報機能による後期の線状化規則を混同してはならない。両タイプを区別する拙稿(1975)や本稿の分析は命令文(37)と(36 a)のlaの位置の相違を文法的に説明できる。しかし有吉(1977)の規則は、(36)は

- (37) Véala usted.

定形動詞を含むから付接辞が左に出て、(37)は肯定命令だから右に移ると述べるにとどまり、なぜ定動詞の肯定命令であればcliticがそこにあるのかについて何も語らない。

[注]

1. 出口 (1972) 及びその文章化, 出口 (1975) はこの疑問を解明しようとする試みの一つで, その基本的考え方は本稿に継承されている。
2. 絶対的位置で規定する分析は稀れだが, 例えばBordelois (1974:18)に見られる“付接辞目的語は [free NP削除の前段階で] 常に [文頭から数えて] 2番目の位置”という一般化がある。尤もこのようなルールは成り立たないのだが:
  - i) Yo lo hago. 2番目
  - ii) Yo no lo hago. 3番目
  - iii) Prometo no hacerlo. 3(4)番目
  - iv) Que usted no lo haga. 4番目
3. 両者の対比検討についてはv. gr. Strozer(1976:106-13) 参照。
4. 主格呼応標識との平行関係についてはCf. 出口 (1973)。
5. 筆者の知り及ぶ唯一の例外はGarcia (1975:473-4) の暗示的な言及である。
6. 叙法 (mood) のmarkingもこの空所で時制にoverlapして行なわれる。
7. 時制動詞PastがNeutに支配される時, 前者はhaber-d(o)形をとり, Pastの上位にあるTense verb(s)がhaberの時制を指定する。詳しくは出口 (1977:18) を参照。
8. 出口 (in preparation)
9. VrootとBslotの間に介在するtheme vowelは純粋な形態規則で挿入されるので, ここでは無視する。
10. 呼応現象の一般的規定とスペイン語cliticとの関係については出口 (1979a, to appear, & in preparation) で論及。
11. 推測の域を出ないが, NPのvocativeにおいて中心語が頭位に露出される。(amigo mía, hija mía) ように, 「文」のvocativeである命令文でheadにふさわしい動詞を前置しようとするのではないだろうか。
12. 動詞冒頭を空所にすることもcompの特性の一つであるとして,  $-r, -ndo$  は  $\phi - r, \phi - ndo$  なる形態をもつという別の見方もできる。その場合compが編入される時にdummyがA slotに,  $-r, -ndo$  がB slotに同時に挿入されればよい。
13. 不定詞が抵抗なく命令文に利用されるのも両者の共通特徴「無時制」が一因であると解釈できる。
14. 本稿では, 目的語呼応規制でcopyされる要素はNPではなく呼詞NPの文法関係を継承する呼応形態素とみなすので, 拙論 (1975:75) のルール(50)は, bound/freeに拘らず文法項 (term) に対する位置制限として解釈し直す。
15. 本稿のテーマに直接関係のない詳細 (非現代語etc.) は省略して引用する。

REFERENCES

- Aissen, Judith (1977); The interaction of Clause Reduction and Clause Union in Spanish. -NELS 7, 1-17
- Aissen, Judith and David M. Perlmutter (1976): Clause Reduction in Spanish. -BLS 2, 1-30

- 有吉俊二 (1977) : スペイン語における弱形代名詞の位置—その史的変遷その二—*HISPANICA* 21, 32—50
- Bordelois, Ivonne A. (1974): The grammar of Spanish causative complements. Ph. D. dissertation, M. I. T.
- \_\_\_\_\_ (1978): Animacy or subjecthood: clitic movement and Romance causatives. *Contemporary Studies in Romance Linguistics*. (ed. Margarita Suárez), 18-40
- Contreras, Heles (1979): Clause Reduction, the Saturation Constraint, and Clitic Promotion in Spanish. *Linguistic Analysis* 5, 161-182
- 出口厚実 (1971) : スペイン語動詞屈折語尾の構造—大阪外大学報23, 35—59
- \_\_\_\_\_ (1972) : 人称代名詞配置・移動に関する考察—第18回日本イスペイン語学会口頭発表 (於: 駒沢大学)
- \_\_\_\_\_ (1973) : スペイン語に主語代名詞削除は存在するか—大阪外大学報29, 3—12
- \_\_\_\_\_ (1975) : 接語形代名詞の位置に関する統語的考察—大阪外大学報33, 65—79
- \_\_\_\_\_ (1977) : 基底時制と表層時制・スペイン語時制体系の形態・統語・意味論的素描—*Estudios Hispánicos* 4, 15—28
- \_\_\_\_\_ (1979a) : 呼応の種類 (その1) —大阪外大学報45, 1—17
- \_\_\_\_\_ (1979b) : 過去分詞は何と一致するか。—*Más y Menos* 2, 4—13
- \_\_\_\_\_ (to appear): 呼応の種類 (その2) —大阪外大学報 (1980)
- \_\_\_\_\_ (in preparation): 呼応の種類 (その3)
- Garcia, Erica C. (1975): The role of theory in linguistic analysis: The Spanish pronoun system. North Holland Publishing Co.
- Givón, Talmy (1971): Historical syntax and synchronic morphology: An archaeologist's field trip. *CLS* 7, 394-415
- Luján, Marta (1979): Clitic promotion and mood in Spanish verbal complements. IULC
- Kayne, Richard S. (1975): French syntax. The transformational cycle. The M. I. T. Press
- Quicoli, A. Carlos (1976): Conditions on clitic-movement in Portuguese. *Linguistic Analysis* 2, 199-232
- Rivas, Alberto (1977): A theory of clitics. Ph. D. dissertation, M. I. T.
- Rodán, Mercedes (1974): Constraints on clitic insertion in Spanish. *Linguistic Studies in Romance Languages*. (ed. R. Joe Campbell, Mark G. Goldin and Mary Clayton Wang), 124-38
- Strozer, Judith (1976): Clitics in Spanish. Ph. D. dissertation, UCLA

(October 1, 1979)